

2. 1 1. 1 雌阿寒岳

ポンマチネシリ第4火口周辺では、2008年11月の噴火以降の地温測定結果に大きな変化はみられない。また、2006年3月の噴火で形成された北西噴気下部の噴気地では、高温域の縮小および地温低下が進んでいる。

2010年6月にGPS連続観測点（3地点）で受信機を交換（1周波から2周波のアンテナへ）した。これにより上下変動の季節変動が改善された。ポンマチネシリ火口を挟む基線では、最近火口がわずかながら膨張している傾向がみられる。

山麓の湯の滝における水質分析の結果、2006年頃まで減少傾向を示していた塩化物イオン濃度が増加する傾向がみられている。

2. 1 1. 2 十勝岳

2006年秋頃から62-II火口周辺が膨張する地殻変動が続いているが、62-I火口の地温連続観測および大正火口上部～62-I火口で実施している1m深地温測定の結果には大きな変化はみられない。

2010年6月にGPS連続観測点（2地点）において雌阿寒岳同様に受信機を交換した。解析の結果、前十勝観測点では62-II火口周辺の膨張傾向を示す西向きの変動が続いており、山腹の磯部跡観測点においてもわずかながら膨張傾向を示す北向きの変動が続いている。

2. 1 1. 3 樽前山

熱活動が活発であるA火口、ドーム中腹のB噴気孔群の温度は、熱電対による直接測定でそれぞれ600℃以上、500℃以上であり、高温状態が続いている。また、2009年夏以降地熱活動域の拡大傾向がみられているA火口周辺においても高い地温が続いている。

山麓の温泉沢における水質分析の結果、全体的に成分濃度が低下する傾向が続いている。

2. 1 1. 4 有珠山

西山西麓火口群周辺域で実施している1m深地温測定（連続および繰り返し測定）の結果では、火口群北西側の地熱域では2008年6月から地温が低下しはじめ、高温域の縮小および地温低下が進んでいる。

2. 1 1. 5 駒ヶ岳

火口原南側における地温連続記録に大きな変化はみられない。GPS連続観測の解析結果では、火山活動に起因するような変動はみられない。

山麓の駒の湯では観測開始の1997年以降成分濃度の増加および水温の上昇傾向がみられたが、2004年以降は成分濃度に大きな変化はみられない。留の湯では1991年以降、成分濃度に大きな変化はみられない。

2. 1 2 履歴未解明地域における津波堆積物の広域調査

（担当）：川上源太郎・岡崎紀俊・廣瀬 亘・石丸 聡・高橋 良・大津 直・仁科健二・田近 淳

東日本大震災を受けて、北海道沿岸における津波履歴の実態については、沿岸自治体だけでなく道民にとっての大きな関心事となっている。特にこれまで十分な調査が行われていない日本海沿岸域やオホーツク海沿岸域については、震災を踏まえた防災計画の見直しのためにも、早急に津波履歴を明らかにする必要がある。本研究課題では津波履歴の未解明地域について、文献収集、広域概査、ならびに津波堆積物との指摘がある事例について確認調査を行った。このうち広域概査では、津波堆積物の可能性のある堆積物を数地点で見出したが、科学的検証に耐え得る十分なデータは得られていない。なお本研究課題で得た知見は、平成24年度から実施する重点研究による詳細な津波履歴調査の基礎資料とする。